インターネット版

白夜

第９号

2023 年３月

北海道スウェーデン協会

皆様におかれては、いかが、お過ごしでしょうか。

かなり期間が空いてしまいましたが、今年最初の「白夜」をお届けします。今回は、道外から二通の寄稿をいただきました。一通は札幌ご出身でスウェーデン在住のフリドルフ智子さんから、一通は神奈川県にお住いで、同地にある北欧製品を扱うお店、ダーラナガーデン店主の古藤朝子さんからです。どちらも、執筆時の熱意が感じられる大変に読み応えのある、また学ぶことの多い文章です。

さて、どんな内容でしょうか。興味が沸きますね。

将来の国際試合で会える日を。フロアーボールがつなぐ交流。

フリドルフ智子

（同じ北欧のフィンランドとの試合は毎回白熱）

私はスウェーデン人の主人と結婚し、生まれ育った札幌から、スウェーデン第 2 の都市ヨーテボリに移住してこの春に 17 年目になります。この夏に 15 歳になる息子は、8 歳からスウェーデン発祥のスポーツ、フロアーボール（Innebandy）をやっています。今回このスポーツをたくさんの方に知っていただきたく、協会にお願いをしたところご厚意を得て記事を書いています。

フロアーボールは 1970 年代にスウェーデンで生まれたスポーツで、サッカー/フットサルに次いで人気があります。スウェーデン語でインネバンディといい、Inne＝室内、Bandy＝スティックを使ったボール競技という意味からわかるように、室内ボール競技で、ゴールに多く点数を入れた方が勝ちというスポーツです。ゴールキーパー1 人、プレイヤーが 5 名以上で 1 チームが構成され、アイスホッケーと同じようにプレイヤーが交代しながらゲームが行われます。ボールはプラスチック製で、スティックも安いものなら 2000 円位からあり、普通の運動靴で行う事ができるので、サッカーと同様に始めやすいスポーツです。

スウェーデンフロアーボール協会に登録されているクラブチームは、900 以上もあります。また、クラブチームに所属しなくても、学校の遊び時間や学童でやったという人も多く、スウェーデンに住んでいる人で知らないという人は、まずいないでしょう。またスポーツショップには必ずコーナーがあって、専門店もあります。 スウェーデンを良く知っている会員の皆さんにはご存じの通り、スウェーデンの冬は緯度の関係で暗く長いのが特徴です。冬は、極夜と呼ばれる日照時間が 6 時間を切る時期になります。また北の方は、北海道と同様に雪も降り、さらに気温も低いので、人気のサッカーも冬には活動には制限があります。室内競技のため、天気に左右されないフロアーボールに、北の方に強いチームがあるのは、そのせいではないかと思われます。もちろん人口の多い、首都ストックホルム近郊に強いチームはありますが、スウェーデンリーグで優勝を一番多く手に

しているのは、ダーラヘストで有名なダーラナ地方にあるファールンのクラブです。また強豪チームの一つであるダーレンは、スウェーデン北部の街、ウメオにあります。スポーツで地方チームが活躍するというのは、街自体が盛り上がりますし、有名選手が自分達の街から出るかも？という夢が持てます。

（ファールンはピンク色のユニフォーム）

現在のところ、オリンピック種目ではないのですが、正式種目への動きは継続して行われています。また、世界選手権、ヨーロッパ選手権はずいぶん前からあり、年々世界的に競技人口は増えていると言われています。 日本で生まれ育った私が最初からこのスポーツを知っているはずはなく、知るきっかけは、なんと日本人代表チームの女子選手に声をかけられたことでした。息子が 3 歳のときに身内の結婚式でストックホルムに行った際、走り出した息子を「待ちなさい！」と大きな声を出した私に、彼女が気づいて「あの、日本人の方ですよね」と声をかけられました。怒った声を聞かれて恥ずかしい思いと、日本語で話しかけられる機会がほとんどなかったので、なんで今このタイミングで声かけて来たんだろうという気持ちでした。そして、「私は、フロアーボールの日本代表で、今回スウェーデンのチームに入るために来たんです」と言われ、私は「フロアーボール？」きょとんという感じでした。彼女は高橋由衣さんとおっしゃって、現在もスウェーデンのトップリーグでプレーをしておられます。また日本代表と海外プレイヤーの経験から日本での普及活動もされています。

（ダーレンの HP より）

息子が 1 年生で日本人補習校を辞めた事をきっかけに、習い事を何かさせようという事になりました。主人は、合気道等の武道を、息子はサッカーを希望しましたが、「そうだ、フロアーボールは室内だから雨とか関係なくて良い。。」という私の都合を優先し、息子をフロアーボールのクラブに誘導しました。何せ最初の頃は親の私は、練習に付き添ってなければなりませんでしたので。

（初めてのチーム写真）

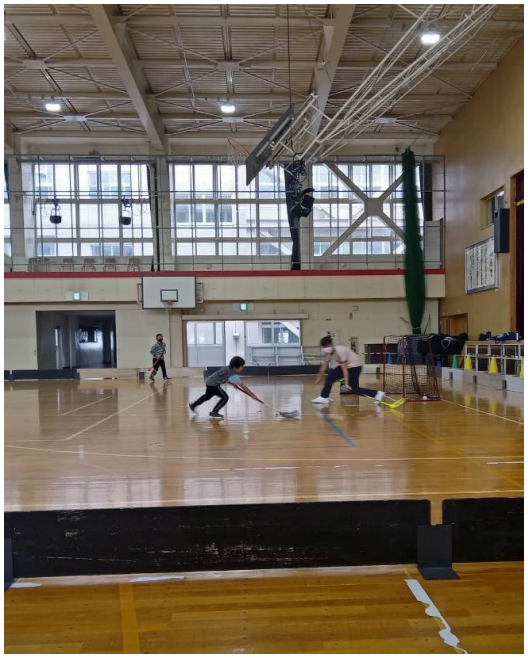
こうして、息子は途中辞めたいと言った時期もありましたが、なんだかんだ続けること、7 年。今では所属チームで一番の古株になりました。もともと、プレイヤーをしていた息子ですが、3 年前からゴールキーパーに専念するようになりました。他のチームのコーチに声をかけられたりする程、本人は力をつけているようですが、親としては、点が取られないかと毎回ハラハラです。ちなみに、13 歳位でもボールをフルスウィングのショットをすると、時速が 100km/h を超えてくるのでボールが見えない事もしばしばです。防具はつけていますが、時々防具の薄

いところにシュートがあたって、ボール跡が残る青アザをつくったりしています。

（まだプレイヤーだった頃）

（1 年上の試合にも時々出ます）

日本であまり知られていないマイナースポーツだとはわかっていましたが、昨年 4 年半ぶりの帰省が決まった時に「日本の練習に参加したい」とチームのコーチにお願いを本人がしていました。コーチから「日本フロアーボール連盟に連絡するんだが、SAPPORO と TOKYO は近くじゃないが大丈夫か？」と聞かされ知り、慌てて先ほどの高橋さんに連絡をして、札幌近郊のチームを紹介していただきました。紹介していただいた指導者の久保さんから「ぜひ参加してください！」と快く返事をいただいて、帰省の時に 2 人でいそいそと出かける事にしました。
しかし、普段から「なんでも揃う、なんでもある＝日本」という認識が、ここにきて崩れました。まず、今まで普通に使っていたコート周りに設置されるフェンスが、見た事のない手作りのものだったことでした。手に入るものを利用して、さらに持ち運びができるように工夫して作られていた事に感心しました。スティックも、日本で買えばいいかと思っていたら、札幌のスポーツ店では通常は売っていなく、東京に日本で唯一あるお店、または海外から取り寄せして購入するという状況を知る事になりました。あんなにその辺で売っているのに、ワールドカップもあるのに、日本では本当にマイナースポーツなんだなと思い知らされました。


（初めて練習に参加した時。マスクも初めて着用してやりましたが、慣れずに途中で外しました）

今回の滞在で、札幌にある2つのチームの練習に参加させてもらいました。どちらのチームも小学校1年生から中学生、さらに日によっては大人のチームもありました。3週間の滞在中、合計4回も参加する事になりました。人数も各チーム20-30名はいたと思いますから、フロアーボールを楽しいと思ってもらえてるんだという事も実感しました。どちらのチームにも、息子と年齢が近い/同じ子達がいて、知り会えた事は、息子にとっては帰省中の楽しい時間になりました。息子は日本語をほぼ理解しますし、しゃべる事もできますが、だからといって友達を作る場所を帰省中で作る事はなかなか難しい事です。でも、フロアーボールを通して交流ができた事は本人にとって大きな収穫になりました。次の帰省までに、もっと上達をしたところを見せるんだというスイッチも入り、帰ってきてから以前に増して練習を頑張っています。

（記念写真を撮らせてもらいました）

また、息子自身が普段やってる事と日本の様子には違いがある事をある程度理解した上で、息子なりに「こうしたら良くなると思う」という事を伝える事をしたいと言い出しました。自分が関わったチームにもっとうまくなって欲しいようです。今回は札幌だけでしたが、新得町にもチームがあったりして、次はそこに行けるかなとやっています。そして、いつか今回関わったクラブチームの選手が、本場スウェーデンに練習参加してくれたらいいな、ついでに、日本のお菓子をみんなに持ってきてくれないかなというのが願いです。

（現在所属チーム）

もし会員の皆さんの中に、少しでも興味がある方がいらっしゃいましたら、ぜひ札幌フロアーボールクラブに気軽にお問合せ下さい。そして、こんなスポーツがあるんだなと知っていただいて、多くの方に広めていただけたらというお願いです。そして何より、日本ではフロアーボールはまだまだ発展途上のスポーツですから、北海道での普及が進む事によって、全国でも有数の強豪チームが誕生する事を、ここスウェーデンから願っています。

札幌フロアーボールクラブの連絡先

ryosuke.hiraiwa@sapporo-c.ed.jp（平岩さん）

いかがでしたでしょうか。日本でも、とりわけ、冬は屋外での球技が殆どできない北海道でフロアーボールが普及して、そこからまた北海道とスウェーデンの交流が広がることを切に願うものです。

次に、古藤さんの文章をお読みいただきたいが、その前に古藤さんと当協会（というか私との）出会いについて、簡単に記しておきたいと思います。

多くの人がそうであるように、私も旅行が好きです。ただ、多くの人が訪れたがる神社仏閣や絶景ポイントにはあまり興味はありません。

普通の市や町の街中を歩き回るのが好きです。

何年か前に福岡市に勤務していたときに余暇を使って訪れた市の中には、三次、益田、人吉、延岡等々があります。これといった名所があるわけでもなく、北海道の人なら何県にあるのかさえ知らないかもしれません（順に、広島、島根、熊本、宮崎の各県）。それに比べると、静岡市は知らない人はいないでしょう。

今年の２月初め、その静岡市を訪れました。十数年前の最初の訪問のときは数時間のみの滞在でしたが、改めて新幹線駅前に立つと、人口は札幌の半分もないはずなのに、大きな都市です。地下街もあります。駅から地下街に導かれて、途中で地上に出たら伊勢丹百貨店です。気の向くまま入店して、エスカレーターで三階まで至ったら、ダーラナガーデンの特別展示との広告が。もしやこれは、スウェーデンに関係あるのではないかと思って、すぐに行ってみました。

妻がそこにいた女性と話し始め、そのうちに、その方が妻の実家から歩いていける距離のところに店舗を構えていることがわかりました。なんいう奇遇。それが古藤さんです。

というわけで、さっそく、今号への寄稿をお願いしたところ、快く応じてくださいました。当日の限られた時間の会話では十分に伺うことができなかった古藤さんとスウェーデンとの繋がりを知ることができて、私としてもとても新鮮な思いで、いただいた原稿を読んだところです。

（協会事務局長　目黒聖直）

ダーラナガーデンのふるさと

古藤朝子

初めまして。

ダーラナガーデンの店主・古藤朝子（ことうあさこ）と申します。『ダーラナガーデン』は、神奈川県川崎市麻生区に、アトリエショップがあります。北欧の“ちょっと贅沢な“布と、布製品を扱うお店です。スウェーデン・ダーラナ地方の美しい森と自然。そして SWE 語の gården の意味する、母屋や納屋などに囲まれた農家の中庭のように、こぢんまりとしていても、くつろげる場作りの提案がしたい。との思いで名前を付けました。

熱心な北欧愛好家の読者さまでしたら、当店のＨＰをご覧になったことがあるかもしれません。今回は、北海道スウェーデン協会の目黒ご夫妻と、旅先（静岡県）で、偶然、出会ったのがきっかけで、この場をお借りすることになりました。私なりの、スウェーデンとの関わりについて、歩いてきた道を振り返ってみました。最後までお付き合いくださったら、嬉しく思います。

中学時代のスウェーデンの布との出会い

私がスウェーデンへ足を向けるきっかけは、ダーラナ地方にある JOBSHANDTRYCK（ヨブス社）の手摺布との初めての出会いまで、遡ります。1980 年代、東京の中高一貫の女子校で、のんびり育った私は、放課後の部活（美術部）のない日は、銀座でウィンドーショッピングを楽しむような、ませた 10 代でした。いつものように立ち寄った場所に、今まで触れてきた、どの布にも所属しない稀有な布に、釘付けに。少しくすんだような亜麻の色のキャンバスのような地厚な布に、色鮮やかに、ゆったりと大きく描かれた、美しく愛らしい植物のモチーフたち。その表現力の豊かさ、圧倒されるような存在感に、一目で恋に落ちました。

『なんとしても、この布を手に入れたい！』

そう強く願った私は、貯金箱のお小遣いをすべてかき集めて、この布を 1.6m買いました。（我ながら、よく覚えているもの）

工作好きな私は、この布をロールスクリーンのキットを使って、DIY で〈ロールスクリーン〉

を作ったのです。美術部の資材を買いに、よく立ち寄っていた東急ハンズ池袋店では、当時DIY用のロールスクリーンキットを販売していました。
〈ロールスクリーン〉とは、窓辺に設置する日よけです。本体上部にバネが仕込まれていて、布を巻き上げたり、下ろしたりする構造です。布を、紙のようにパリッとさせるために、スプレー糊を塗布して乾燥後、生地の両端をはさみで裁ち落として本体に装着し、操作紐を取り付けて、本体は完成です。天井にＳ字フックを何度も差し入れて、下地を探し、設置完了です！

残念なことに、DIYロールスクリーンは布が重すぎて、巻き上げられませんでした。ですが、10代の自分にとっては、美しい布を毎日眺めることができて、大満足。この自作ロールスクリーンは、学習机の傍に掛けて、植物たちのユートピアのような風景を楽しんだものです。
インテリアというものが、まだ今のように注目されていない時代でしたが、自分のお気に入りの布で、部屋を飾り付けたいと思う気持ちが最初に形になった、ロールスクリーンでした。
　この布は10代の少女が衝動買いするには、信じられないような高価なもの。それでも突き上げられるように、『この美しいものを、何としても手に入れたい』と、思わせるのだから、布自体が、見る者に語りかける力を持っていたのでしょう。当時の私は、この布がどこで作られたのか、名前どころか、国すらも知りませんでした。

北海道旅で目覚めた、旅の楽しさ

やがて都内の大学に進学、最初の夏休みに憧れの一人旅をしました。行く先は、もちろん北海道。別海町で酪農実習生、最後は野付半島の民宿のアルバイトで、働きながら旅をしました。移動の待ち時間の駅やバス停で声を掛けられて、缶ジュースだけでなく、食事や、時には一飯一宿に招いてもらうこともありました。道内でひと月以上滞在し、改めて大好きな場所になりました。春休みに、再び足を運び、夏にお世話になった方に会いに行くと、家族のように迎えてもらいました。地縁のない場所でも、会いたい人がいる場所ならば、第二の故郷にもなるのだ、と。自分なりの旅の楽しさを発見したのも、この時です。そして翌年は、初めての海外へ出掛けてゆくことになりました。しかもTV番組の企画です。

地球ZIGZAG でフィンランドに行く

日曜日の午前中に30分放送されていたTV番組『地球ZIGZAG』。一般人が応募できて、タダで海外に行かれる！ことを知った私は、即座に履歴書にこう書きました。『グリーンランド行き希望で、植村直己さんも滞在していた、イヌイットの人々の暮らしを体験したいです』
芸能人やタレントではなく、一般人をオーディションで選び、隊員の初めての体験を追いかけるという趣旨の番組で、もちろん台本はありません。運よく採用された私に、ディレクター（TVマンユニオンの保坂秀司さん）が用意していたのは、フィンランド。第4の都市・Lahti（ラハティ）にある交響楽団に入って、交響曲で1回しか出番がないシンバルを打つ、というものでした。（当時、東京農業大学2年生だった私が、オーディションで母校の誉（ほまれ）・大根踊りを披露したことが、ディレクターの企画を生んだのかは分かりません。。。）
私はグリーンランドに行かれないなら、断るつもりでしたが、『無料で行かせてくれのに、行かない手はない』 という母に促されて。行かなければ、また違う人生だったかな。

フィンランドは、大国ソ連からの独立運動に影響を与えた、偉大な作曲家・シベリウスを輩出した国。そのシベリウスの交響曲第1番の第3楽章のハイライトに、たった1回登場するシンバルを、オーケストラと共に演奏する---この1発のシンバルを演奏するためのフィンランド

滞在は、2 週間ほどありました（2 月のことです）。シベリウスの住まいや墓地を訪ね、初めての北欧料理・鹿肉に甘酸っぱいリンゴンソース（定番ですね！）をつけることに驚いたり。アパートでの自炊生活。オーケストラのメンバーのご自宅や別荘に招かれ、ご家族と一緒に食事や FIKA したり。凍った湖の上でシンバルの練習をしたのは、冬の北欧ならでは、でした。

フィンランドでの時間は、すべてが初体験で、ＴＶカメラは、私の戸惑いや、失敗。涙や笑いを、淡々と写し取っていました。滞在の後半の日々は、カメラの存在をすっかり忘れて、素の自分だったと思います。
コンサートはもちろん、一般の聴衆の前で行われました。ストラビンスキーの『火の鳥』の演目の後が、シベリウスの交響曲。この出来事は、地元新聞にも掲載されました。。。
コンサートの翌日は日本へ帰国するため、Lahti の鉄道の駅のベンチで、ヘルシンキ行きの列車を待っていた私に、品の良い 2 人連れのご婦人が、声を掛けてくれました。
『私たち、昨日のあなたのコンサート、観たんですよ。頑張りましたね。』と。見ず知らずの外国の人との、そんなささやかな会話が、とても嬉しくて。言葉は違っても、北海道の時と同じ、嬉しい気持ちになりました。

地球 ZIGZAG は、毎回スタジオ収録ではゲストを呼ぶのですが、私の回は泉谷しげるさん。その泉谷さんが、『（自国の）文化の基礎がしっかりあると、その上に乗っかって、パロディーすることも許すような、懐の広さがある』　という趣旨のコメントをされていて、今の私なら、その意図するところは良くわかります。生まれ育った背景も、言葉も違う。何より、音楽経験のない素人を、プロのオーケストラが受け入れてくれた。関係者の皆さまに、改めてお礼を申し上げたいです。

フィンランドから、スウェーデンへ

こうして、ひょんな出来事から初めての北欧行きを体験した私は、ＴＶの放映後、再び、その年の夏休みに Lahti を訪れました。
TV カメラが回っていない、一人旅のフィンランド。お世話になったオーケストラのコンサートを、今度は一聴衆として聴きに行き、指揮者のオスモ バンスカさんのヘルシンキでの大聖堂でのコンサートには、ユース宿で一緒になった、外国の女友達も誘い、一緒に聴きに行きました。リハの合間に、バンスカさんが私に気づいて、舞台から手を振ってくれて、友達もびっくりしていました。その後、旅の友達と別れて、再び一人、列車で北極圏まで足を延ばしました。9 月の彼の地は、雨が降ると晩秋のような寒さでしたが、北海道旅の時のように、様々な場所での、人と風景の出会いがあり、充実した時間になりました。

旅の終わりに、北欧の学校に行ってみたい。住んでみたい。という気持ちが膨らんできました。そこで、大学 4 年時には、“北欧の学校の視察”と自身に銘打って、フィンランド以外の、デンマーク、スウェーデンの学校を見学する旅に出ました。当時は北欧の学校の情報は日本ではほとんど入手できず、学校の HP もない時代ですから。さて、6 月頃の北欧は美しく、人々は陽気で、出会う人の印象が一番良い、というのも後年、知りました。（冬の北欧人は、そんなに陽気ではないですもの。）

フィンランドの第二外国語がスウェーデン語という理由で、スウェーデンの学校への進学をあっさり決めました。まずは、言葉の（スウェーデン語）習得を目指し、1 度目の学校（1995 年-1996 年）では、移民クラスに在籍し、スウェーデン語と文化について、学びました。生徒はスウェーデンに移民としてやってきた、在スウェーデン歴が 5 年くらいの生徒が中心でした。場所は、スウェーデン西海岸のボーヒュース地

方の海沿いの村・Grebbestad(グレベスタッド)。夏の海水浴地として人気の場所ですが、冬は降雪が無くても、海風に身を切られるような寒さ、そして11月の暗い日々は、本当につらかった。旅の時にはなかった、逃げられない苦労が待っていました。
日本では説明が不要なことでも、一つ一つ、丁寧に説明して、相互に歩み寄らないと交流が生まれないという、当然の帰結もこの時に身をもって知りました。移民クラスは、ソマリア人が半分、あとは様々な国から単身で学びにきたクラスメートが半分という顔ぶれで、実に多国籍でした。最初の3か月のFIKAやランチ、夕食時に、同席しているスウェーデン人たちの話題が全く分からず、特に笑いについていけないのが経験したことのない悔しさでした。一同が、ドッと笑いに包まれているのに、一人、どんな顔をしていいのか分からない。。。
そんな日常でしたから、一人、カヤの外にいるのが寂しく、よく日本に残してきたボーイフレンド（現在：夫）に、コレクトコール（！）で愚痴をこぼすと、彼のアドバイスは、（私の気が付かないところで）きっと周りの人はあなたのことを、気に掛けてくれているから、周りへの感謝を忘れないように。というものでした。移民のクラスメートと違って、あなたは自分の意志で、スウェーデンに今、いるのだから。と。

そんな温かいアドバイスが少しずつ、理解できるようになって、私は発想を変えて行動することにしました。自分が発案して、週末のパーティーを企画したり、言葉のハンデのため、面倒に感じることでも、なるべくイベントには参加するように心がけました。長く暗いスウェーデンの秋、冬に自室に引きこもっていたら、本当にマイナス思考になりそうですから。
この発想の転換は、正解でした。興味があってもシャイなスウェーデン人は、正体が分からない外国人に、積極的に話しかけるような気質ではないようです。でも、興味はあるので何かきっかけがあれば、知りたい、聞いてみたい。と思っている人々だと感じました。
一方で、当時の移民の多数派のソマリア人たちは、陽気でノリがよく、ラテン気質の人が多く、良い意味でもそうでない意味でも、大らかで打ち解けやすい。家族や友人、仲間も多い移民の人々は、積極的にスウェーデン社会に参加する人と、そうでない人が見受けられました。再起を図らなくてはならないスウェーデンでの生活で、言葉の問題や価値観の違いを解決できないと、軋轢も多いだろうと想像され、気の毒だなと思いました。

手工芸コースに定評のある学校でしたから、織物や陶芸、金属加工や家具製作クラスなども充実していました。言葉の問題で四苦八苦して机に向かう私にとって、自分の手で創作する喜びを手にしている彼らが、羨ましかった。
寮生活を共にしている彼らの姿を、日夜見ながら、私の手工芸への興味が、再び膨らみ始めたのです。こうして1995年から1996年の学校生活を終えて、北欧ブームは、まだ到来していない日本へ帰国。デンマークのカーテン、スウェーデンの家具や手工芸品を扱うお店で、働き始めました。

ヨブスの布との再会

八王子にあったこのお店は、オーナー夫妻がスウェーデンの角ログの輸入住宅を別荘用に建てたのが縁で始めた、インテリアショップでした。小さなお店でしたので、北欧での買い付けから通訳、通関業務はもちろん、お店での販売、時には、カーテンの取り付けから、家具の配送までやりました。北欧のメーカーから、日本のユーザーさんにまで携わる仕事だったので、自分のお店を持つイメージが、働いている間に、自然に持てるようになりました。
そしてこの小さなお店で働いているときに、スウェーデンの家具会社・Carl Malmsten社でヨブスの布と再会するのです！ストックホルム

の瀟洒なブティックで、マルムステン氏のデザインしたソファの張地の見本帳を手にしたときに、それはありました。自作した、巻き上がらないロールスクリーンの生地デザインに、10年以上の時を超えて、再会しました。この時、自分の目には見えていなかった、運命の糸がつながった！と今でも思います。

中学時代、一目で恋に落ちた、というほどのテキスタイルがヨブスというもので、スウェーデンのダーラナ地方に工房がある。その情報を聞いてから、実際に工房を訪れた時は、様々のほかのデザインをみて、再び感激しました。先代のEva Jobs社長にも会い、思いを伝えることができました。

2回目のスウェーデンの学校は、ヨブスの布との再会がきっかけで、ダーラナ地方のLEKSAND（レクサンド）です。留学費用は、それまで勤めていたインテリア会社の退職金を、すべて充てました。1999年のことで、この年、結婚したばかりの夫を日本に残して、単身でのスウェーデン生活です。
レクサンドの学校は、シリヤン湖を眺める美しい場所にあり、対岸にはヨブスの工房のあるVästanvik村（ヴェスタンヴィーク）が見えます。この学校は、ヨブスの工房が近くにあるテキスタイルを扱える織物学科という2点で選びました。
学校の入学式が終わって翌日には、自転車を借りて、心弾む思いで工房へ行き、憧れのヨブスのデザイン・Tistlar(アザミ)赤を2m購入し、学生寮の自室に早速、タペストリーとして掛けました。レクサンドの町のカーテン屋さんで、カーテンポールを買い、壁に穴をあけないように工夫して設置し、クリップで布を留めました。中学生の時にロールスクリーンを自作するくらいですから、朝飯前です。部屋に遊びにくる友人たちは、目を丸くして驚いていました。
このレクサンドの学校で、2000年-2001年の外国人は私だけでした。ダーラナ地方はボーヒュース地方とはまるで別の方言が存在し、ここでも言葉は苦労しました（今もですが)。ダーラナ地方は、村ごとに言葉も違うほど方言が豊か。長い厳冬期に、集落が孤立する風土の影響だということです。同じ村出身の人同士の会話になると、よそから来たスウェーデン人は、内容が分からないことも多いとか。

それでも、『スウェーデン人の心のふるさと』と多くの人々が認める理由が、この地にあります。まず、自分たちの伝統文化を大切にする気質が、ほかの地域より強いと感じます。
人生の節目に当たるときは、伝統的な衣装を身に着ける人が多いのがダーラナ人たち。装いの一つ一つが、伝統工芸品です。銀細工のブローチ。羊皮を使ったコート。織物で作るエプロン。刺繍を施したスカーフ。綿のハンドプリントのスカーフは、ヨブスが染めた植物柄のデザインもあります。その素晴らしい伝統装束を身にまとい、伝統楽器のバイオリンを弾きながら踊るポルカのリズムは、6月の夏至のお祭り時に、最も民族的な高揚を引出しています。

また、地元産の手工芸品を、インテリアに飾るお宅も多いですね。ヨブスの椅子張り用の布で張られたソファやカーテンが、経年で色が褪せても落ち着いたたたずまいで、時を刻む壁時計の音と共に、部屋の空気に優しく混ざりあっている民家を、何軒も好ましく拝見したものです。その家の歴史と共に、時間を重ねたような古いダーラナ馬の置物たち。何体も窓近くに整然と並べられている様子は、昔日、出稼ぎの父親が子供たちへのお土産に、手刀で掘り作っていた時代を彷彿とさせます。
白枠で組まれた窓からは、この土地の丘陵に沿って、ファールンレッド色の外壁の民家が白樺やナナカマド、リンゴの木が植えられた緑越しに、ゆったり眺められます。
壁の厚い木造家屋の窓内には、小さなランプと

ゼラニウムやプリムラの鉢などが、手刺繍の敷物の上に置けるスペースがあり、屋内からだけでなく、屋外を通る人の目を楽しませてくれます。冬の日が短い時期は、窓越しの民家のランプの明かりたちが、優しく雪景色に映し出され、ホッとさせてくれたものです。

豊かさの象徴だったという、クルビッツの模様が手描きされたスコープ（食器棚）。動かなくなっても大切に受け継がれている、床置きの大きなモーラクロック（置時計）。使わなくなった衣類やシーツ、カーテンの布を裂いて織ったトラースマッタ（ラグ）。カーテンや家具の色味に合わせたものが、何枚も敷かれています。自然をモチーフにして手織りや手刺繍が施された、ボーナッド（タペストリー）で壁を飾る。テーブルやチェストの天板には、必ずと言ってよいほど、織物や染め物の布が広げられています。陶器やガラス、メタルなどのキャンドルホルダーが中央に置かれ、FIKA の時間はろうそくを灯して、くつろぐ時間のスイッチを入れるようです。（本物のキャンドルの炎の揺らめきは心地よく、我が家でも、完全に習慣になりました。今では IKEA で安いティーキャンドルが購入できますが、以前はスウェーデンで袋詰めをまとめ買いし、スーツケースに入れて持ち帰るくらいでした。）

織物コースのクラスメートたちは、布使いの名手が揃っていました。夏の休暇を利用したＤＩＹリノベーションした、居心地のよい別荘の居間やサンルームで、インテリア談義から、時には噂話まで、お茶や食事を共にしながら持った時間は、心温まる思い出です。
私に、スウェーデンの布使いの豊かさを教えてくれたのは、学校ではなく、クラスメートたちだったと思います。元々は、立地で選んだ（ヨブスの工房に近い）学校でしたが、人との出会いが、それをはるかに上回る収穫であり、私にとってかけがえのない財産となりました。こうして、帰国した 2001 年の秋・10 月に Dalagården（ダーラナガーデン）を立ち上げました。

ダーラナガーデンについて

大好きなヨブスの手摺布（ハンドプリント）を扱うネットショップとしてスタートし、2006 年には川崎市麻生区高石に居を移してから、アトリエを兼ねた実店舗が出来ました。2023 年には、実に 22 年という歳月が経過しています。お店を始めたころは、気持ちが先走りしていて、世間知らずなところも多々あったと、自覚しています。小さな商いですが、自分の持てるものを、常に出し切ってお客さまに向かいたいと願って走ってきました。

取引先も少しずつ増えて、ヨブス社以外にも、ヘルシンランド地方で洗練された麻織物を作っている Växbolin（ヴェクスボリン）社、シルクウールの糸で編むニットハウスの OLEANA（オレアナ）社は当店の扱う自慢の北欧生まれたちです。この 2 社は、レクサンドの織物学科で学んでいるときに知ったメーカーで、地元でものづくりを一貫して行っており、私自身が大ファン。心から応援したいと思う、作り手たちです。他にも、魅力的な白樺の作家さんや、木工作家さんも、ダーラナ地方で出会うことができました。優しい水彩のタッチで植物やトムテたちを描き続けている、北欧で人気の絵本作家の Maj fagerberg さん。
最近は日本の職人さんともつながりができて、ランプシェードやカーテン、家具のメーカーと、それぞれの分野で力走している皆さんの技術のおかげで、提供できる商品が広がっています。素晴らしい素材を、ダーラナガーデン好みに作り上げて、好きだと思ってくれるお客さまに橋渡しできるこの仕事を、私はこれからも続けていきたいです。
若い時は、自分を作っているのは自分自身だと、思っていました。人生も折り返し点を過ぎた今は、私と出会ってくれたすべての方々（人だけ

でなく、植物や生きものすべて）が、私とダーラナガーデンを育んでくださったことに気が付きました。このことが、仕事から得た最高の収穫です。
さて、長々と、私の個人的なスウェーデンとの関わりの思い出話を、読んでくださり、どうもありがとうございました。皆さまも、どうぞスウェーデンとよき出会いを☆

アザミ（赤）のクッション。アトリエで柄出しにこだわりながら縫製しています。

ヨブスの布をランプシェードに。ランプ台はダーラナの白樺の木を挽いて製作。

北欧女性の憧れブランドといえば、OLEANA（オレアナ）ニット。隣国ノルウェーで、一貫してものづくりしています。現デザイナーはスウェーデン人のマチルダ・ノルベリさん。

@DALAGAARDEN

【いつか北海道で催事やりたいです♪呼んでください！】